

『粟村敏顯翁略傳』

(粟村獎學團、昭和18年刊)

～水金のルーツを訪ねて～

水金創立50周年記念誌編集委員会

水金のルーツともいえる粟村鉱業所(株)の歴史を調べていた頃に、神田の古本屋で入手したのがこの本である。水金との関係は今春刊行予定の記念誌に譲り、ここでは日本のタングステン王といわれた創業者粟村敏頭について読み解く。



尾道市の育英事業として粟村奨学制度の存在を世間に知ってもらうために出版された和綴じ本。

翁は幕末の嘉永2年(1849年)に、広島県尾道の山陽道坊地(ほうじ)峠登り口の一軒家に生まれた。当時、粟村家は芸州浅野家の御用を承る傍ら農業を営んでいた。父譲りの大柄で腕白な少年だったが、厳格な躰のもと母には生涯頭が上がりなかった。明治2年(21歳)、大阪府外同事務局を皮切りに官吏生活が始まり、海軍省などを経たのち、明治10年、西南戦争で負傷。その後工部省鉱山分局に勤務、明治16年(35歳)に佐渡鉱山百枚坑で初めての鉱山経営(3年足らずで廃業)、足尾銅山技師、三井財閥の岐阜県茂住鉱山管理職などを経験した。そして、明治31～43年(50～62歳)にかけて、岐阜県高根鉱山、高知県富岡鉱山、山梨県三里鉱山の経営に当たった。

明治42年(1909年)に鉱山買取のため九州へ下る途次、山口県木和田(後に翁が喜和田と命名)の廃鉱となった銅山に立ち寄った。谷一面を埋め尽くした屑鉱石が翁の目に留まり、これが重石鉱であることが判明し、わが国初のタングステン鉱山の大発見となった。翁はすぐに鉱山を買収したが、当時、重石鉱の精錬方法や用途はドイツのみが知る国防上の極秘事項であった。翁の発見を伝え聞いたドイツから鉱山技師が訪れ、当時としては大金の百万円で譲り受けたいとの商談がなされた。関係者の大多数が権利を譲渡すべしという中、ただひとり翁の子息敏家が反対、翁も子息の意を採り、父子で鉱山運営とともに精錬方法と用途の究明を続けることになった。そして自社で精錬できるまでの間は、鉱石のほとんどすべてをドイツに輸出した。

当時ようやく日本でも、官営の八幡製鉄所でフェロタングステン製造技術の研究が開始されたが、秘して伝授を拒む時代であった。敏家は欲待されたドイツで技術を究め、第一次大戦も終結に迫った大正6年(1917年)7月に、静岡県三島にフェロタングステン精錬場を竣工させた。翁は事業これからという大正7年8月に行年70歳で歿した。

歴史叙述の観点から人名、社名などの敬称は省略しました



喜和田鉱山調査のドイツ人技師達。右端は翁、その左は敏家。



ドイツ人が訪れた当時、喜和田鉱山は十数人の人夫が谷間に捨ててある鉱石を集めて運ぶ程度に過ぎなかった。



喜和田タングステン鉱山創業当時の全従業員。前列右端・翁の娘婿とその左・神戸税関の秦逸三(後の帝国人絹社長)両氏視察時の写真(明治43年)。

時は移り昭和38年4月、生野鉱山の鉱石からフェロタングステンを製造していた三菱金属鉱業(現、三菱マテリアル)と、粟村のタングステン事業が共同出資し、日本新金属株を設立した。同年9月には粟村の京都府宇治工場を独立させて粟村金属

工業株とし、翌年11月にマンガン事業を川崎製鉄(現、JFEスチール)と共に立ち上げた。水島合金鉄株の設立である。その当時の粟村金属工業株の社長は、わが国初のタングステン精錬を実現した粟村敏家であった。(K)



粟村鉱業株の事業(粟村打抜金網ホムベリシより転載)。会社は大正5年6月に粟村鉱業株創立→同7年11月に解散→同10年に合資会社粟村鉱業所→昭和10年に粟村鉱業所株と変更。写真は、大正6～7年頃か。

水金のルーツを訪ねて



尾道市の旧山陽道坊地(防地)防土とも書く峠にある芸州領の藩境を示す碑。この右手向い側には福山領の碑と藩所跡がある。峠から芸州側(写真左生側)へ100m折りの坂を上がった辺りに翁の生家があったとされる。